

# 幼年期における新たな防火教育プログラムの開発について

地域：小山市

パートナー：小山市消防本部予防課

16班

コミュニティデザイン学科

建築都市デザイン学科

社会基盤デザイン学科

村上穂波

小林大己

佐藤嘉峻

山口杏花

河埜隼人

下山野萌夏



## 1.背景

阪神淡路大震災では、多数の火災が発生し、消防機関による公助の限界が露呈した。この経験を基に自助・共助の力を育む施策の必要性が高まり、防火・防災教育の重要性が再認識された。一方、東日本大震災において、岩手県釜石市では日頃の防火・防災教育が功を奏し、多くの子どもたちの命を守ることができた。

このことから、防火・防災教育を行い、要配慮者となる幼年期の子どもたちが、自分の命を自分で守る（＝自助）力を身につけることの重要性が明らかになった。また子どもたちが率先して避難を開始することで、保護者や近隣住民の避難をも促し、犠牲者を出さないことにつながると思われる。

## 2.目的

幼年期の防火教育について現代の子どもたちの生活スタイルや保育施設の現状を把握し、より効果的な防火教育プログラムを提案する。



## 3.調査方法と調査結果

1stcycleでは現在の防火教育プログラムに対する意見を保育施設の先生方に聞いた。その調査結果をもとに、2ndcycleで小山市内の保育施設に通う園児の保護者を対象にアンケート調査と保育施設の先生方へのヒアリング調査を行った。3rdcycleでは保育施設の先生方から、提案についてアドバイスをいただいた。

### 【1stcycle】現状の把握

- 今のプログラムに対して不満はないが、新たなプログラムを行う時間を確保することは難しい。
- 家庭での教育の力が落ちてきている。
- 長期記憶に残るプログラムを作成する必要がある。

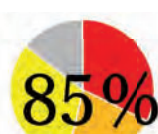
### 解決策：絵本の作成

- 現在読み聞かせを行っている時間を利用できる。
- 絵本のデータを配布することで、家庭でも読み聞かせることができる。
- 日常的に読み聞かせを行うことで長期記憶に残すことができる。

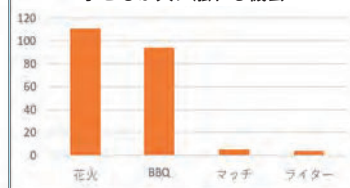


### 【2ndcycle】園児の生活の把握・絵本作成に関わる基本調査

子どもが本を読む機会



子どもが火に触れる機会



## 4.提案

- アンケート調査の結果から子どもたちの85%が本を読む機会があり動物が人気なことが明らかになった。このことから、動物を登場キャラクターとした絵本を提案する。
- 恐怖の対象となる火と煙をそれぞれ「ほのおおばけ」、「けむりおばけ」とした。
- 最後のページには、3つのお約束  
「火には近づかない、火を使ったら速やかに消す」  
「けむりおばけが現れたら、しゃがんで口と鼻を押えて逃げる」  
「逃げたら戻らない」  
を提示し、読み聞かせ終了後フィードバックが出来るようにした。

## 5.今後の展望

作成した絵本のデータを各自治体に配布をし、希望する幼稚園、保育園、認定こども園に無償で提供する。

### 【3rdcycle】絵本の作成・読み聞かせ

- 絵本を作成するために印刷会社と打ち合わせを重ねた。
- 子どもたちの食いつきもよく、飽きている子どもはいなかった。

